

# 工化時報

第15号

## 物質応用化学科

Department of Materials and Applied Chemistry

### 目次

工業化学科から物質応用化学科へ……………P.2 (妹尾 学)
21世紀に向けて(栗田 公夫)……………P.3
工業化学科へのノスタルジア……………P.3 (荒井 康夫)
学科名変更に合わせて(寄稿)……………P.4-6
平成10年度就職状況……………P.6
学生は今、考えていること・悩んでいること…P.7
50周年以降の工業化学科の歩み……………P.8
お知らせ……………P.8
編集後記……………P.8
会社広告……………P.6-8

自然と調和する化学をめざしています



# 工業化学科から物質応用化学科へ

教授 妹 尾 学



平成11年度より理工学部工業化学科は物質応用化学科へ名称を変更する。名称は、単なる符丁の意味から、名は体を表すといった実質的な意味まで、幅広い使われ方をする。もちろん、はじめは実体あるいは理念をもっともよく表す名称がつけられるのであるが、時を経るにしたがって名称と内容とくい違いを生じるようになる。内部の人達は実体をよく知っているので名称が実体と合わなくてもとくに困ることはなく、かえって長い歴史をもつ名称に愛着をもつようになる。一方、外部の人達は名称でその内容を判断することが多く、実体の理解に障害となることがある。

工業化学科という名称が内容を十分に表現しているかという問題提起が出発点であった。大学はまずなによりも教育機関であるから、学科の内容は学生をどのように教育し、社会に送り出しているかによって判断される。本来、工業化学科は化学工業の中核として役立つ化学技術者を育てることを目的とした。事実、工業化学科の卒業生が戦後の化学工業の発展に大きく寄与したことは確かであり、わが国の産業の基盤が製造業にあることを考えると、わが工業化学科の果たした役割は誠に大きいものであった。

一方、私達は歴史をつくって生きている。というのは私達自身も変わるし、私達をとりかこむ社会も変わるという意味である。とくに近年の社会環境そして産業構造の変化は誠に目覚ましいものがある。工業化学科は昭和13年(1938年)創立されて以来、60年の歳月を閲している。この間の学科をとりまく環境の変化は顕著である。産業の発展は技術開発により加速され、工業の発展はなによりも“ものづくり”に左右される。その意味で化学の役割は非常に大きく、深さばかりでなく、広さの面でも絶えず広がっていく。ものづくりは化学工業ばかりでなく、電気・電子工業、建設・土木産業や、自動車、家電などの組立て産業においても中核的な役割を演じている。このような広い分野にわたる化学技術をになうものとして、昔ながらの化学技術者ではもはや不十分であり、より広い視野に立って教育され物質・

材料に対して幅広い知識をもつ技術者が必要になっている。

技術は科学に先立つ非常に古い歴史をもつが、技術が学問として成立するまでには非常に長い時間が必要であった。化学技術は応用化学と化学工学をその基礎としてもつが、これらは現在新しい局面を迎えている。たとえば地球の有限性に根ざす地球環境問題の解決が緊急の課題として提起されており、健全な物質循環システムの構築への貢献が望まれている。

これらの非常に広範にわたる社会のニーズに応えるためには、学科のいれもの自体を広げ、かつ新しくすることが必要である。これは私達の共通の認識であった。新しい学科名称は、より広い物質理解に基づき、新しい応用化学・化学工学の分野を目指すものでなければならない。さらにこれからの工学はその基礎として独自の科学をもつことが必要である。そのような願いをこめて、新しい学科名として“物質応用化学科”が提案され採択された。これは単なる応用化学科にとどまることなく、その基礎として物質の理解を深めることを含意している。基礎的側面として物質化学、その展開として応用化学の2つの面をもつということもできよう。範囲が広く、やや焦点がぼけるといった問題があるかもしれないが、時間の経過とともに実質的内容が明確になり、その特徴が明らかになることを願っている。

大学は教育機関であるが、同時に研究機関としての役割をもっている。本来、大学は伝統を継承し後世に伝えるという保守的な面をもっていたが、近年ではより新しい時代をきり開くという進歩的な面が重要になっている。このことは教育の本義にも通じることである。このためには、なによりも教員が広い知識と深い識見をもつことが要求され、具体的には関連分野の文献をよく読み、矛盾を見出し、これを解決することによってより合理的な学を確立することが、スタッフに課せられた使命となる。

新しい革袋には、新しい酒を！ 物質応用化学科を先見性ある特徴的な学科として育てていくため、工化会の御協力を是非ともお願いしたい。



## 21世紀に向けて



教室主任 教授 栗 田 公 夫

工業化学科が昭和13年(1938年)に創設されて以来昨年60周年を迎えました。この間化学工業界をはじめ各方面で活躍され、日本の科学技術発展の一翼を担って来られました卒業生にとって愛着のある学科名が変更になるということは、寂しいかもしれませんが、21世紀を生き抜くためとご理解頂きたいと存じます。

受験人口が減少し2010年には大学の氷河期を迎えることや実質定員の1.2倍の960名+大学院生70名位が在籍していて、実験室や研究室が超過密状態であること等から、入学生の質の確保、教育・研究環境の改善が急務であるとして、平成4年1月には、当時教室主任でありました荒井先生のときに、入学定員200名から180名に削減する案を学部長に提案しましたが、実現せずに今日まで来てしまいました。また、従来の工業化学科では、対応できないほどに教育・研究の内容が分野の広がりを示してきたこともあり、カリキュラムや学科名変更等が検討され、まずカリキュラムの改正を昨年度に行い、新学科への移行のための準備をしてきました。本年度、すなわち平成11年4月から新学科名「物質応用化学科」へ名称変更されます。この間工業化学科の良き伝統を継承しつつ、21世紀にむけての新たな発展を目指し、まず教育理念・目標を策定、物質応用化学科にふさわしい教育と研究は何かを検討しています。しかし、なにぶんにも大学は、産業界とは異なり、歩の遅い変革ですが、学科名称変更は、21世紀に生き残るための第1歩であり、私ども教職員が大いに努力しなければならぬと決意を新たにしておりますので、諸先輩におかれましてはご理解、ご助言、ならびにご協力を頂きたくお願い申し上げます。

工業化学科への  
ノスタルジア

教授 荒 井 康 夫

東大教授永井彰一郎先生が、この工業化学科を創立されたのが昭和13年(1938年)、東大からたくさんの先生がたを連れてこられ、私学では最初の工業化学科が誕生したのである。当時、工業化学科は京大が第1号であったが、戦争直前の化学技術者の不足をおぎなう要請に応え、各大学の応用化学科はつぎつぎと工業化学科に変身したのである。

第2次世界大戦後は石油化学工業のめざましい台頭により、工業化学科の発展は拍車がかかり、その後の右上りの高度成長は、工業化学科の地歩を不動のものとした。その頃から、創立以来、科を支えられてこられた東大出身の先生がたがつぎつぎと定年を迎えられ、本学出身の若い教員への世代交代が進んだ。第1回卒業生で最初に工業化学科の教授となられた松本太郎先生は、当時われわれ若い助手たちのプリンスであり、あこがれの的であった。

時は流れ、人も変わり、学問も変る。今度は本学出身の中堅教授たちにも世代交代期がやってきた。はからずもそのときに、バブルははじけ、一転して大量生産、大量消費、大量廃棄の時代は終りを告げ、エネルギー・資源節約の時代に突入したのである。これにともない工業化学の学際領域もしだいに拡大して、60年の風雪に耐えてきた工業化学科も、ついに新しい時代に対応できなくなった。その結果として、工業化学科は再び応用化学科に発展的変身をとげようとしている。そして、わが工業化学科も平成11年度から物質応用化学科に変わることに決定している。

受験人口もどんどん減り、理工離れも進む中、大学冬の陣も間近であるが、科の変名は受験対策とかんぐられてはならない。しかし、昨日の工業化学科が、一夜にして物質応用化学科に変わるはずはないのである。教員も変わらないのだ。どんな目標でどう変革するのか、いまの工業化学科の教員の責任は重大である。看板倒れに終ることなく中味で勝負できる実力をすみやかにつけて欲しい。かたずを飲んで見守りたい。

終りに私は最後の工業化学科教授として退任してきたことを誇りに思っている。

## 学科名変更に寄せて

名誉教授 田 村 利 武

“経済の脱工業化”や“実体経済と金融経済の乖離”が言われて久しい。米国を中心とする金融経済の異常なほうちょうは憂うべき現象であり、両者の乖離は乱さねばならない。物造りに長ける国民性をもつ日本人にとって、21世紀を生き抜くため、物造りを中心とする実体経済の重視こそ大切である。

物造りの基本は物質そのものの仕組みや応用を考えることにあり、化学はこの基本に深く関わる学問であり、無くてはならぬ学問である。今回の学科名変更はその意味においても時機を得たものであり、受験生にもアピールすると考えられる。物質応用化学科に資質の高い優秀な学生が多数入学し、化学の大切さ、面白さを知り、化学に誇りをもって学生生活を送り、社会に船出してほしいと願っている。

## 地球環境にかかわる微生物の研究

教授 山 中 健 生

当研究室名「微生物工学研究室」は、微生物を使って物を造っているというイメージが強いように思う。しかし、私どもは物を造るというよりは、微生物と地球環境との関係を研究してきた。工業化学というのは物質を製造するための化学というイメージが強い。近年、有用な物質を製造するだけでなく、製造した物質と環境との関係、さらに進んで化学の力による環境保全を考える必要が生じてきた。このような折に、学科名が「物質応用化学科」になったことは、まさに時代にマッチしたものだといえる。化学を物質の製造だけでなく環境保全にも使うとなれば、応用化学の方が工業化学よりも適用範囲が広いだろうし、物質ということで地球表層つまり環境とも密接に関係している。この折に、当研究室も、「環境微生物学」と名称変更をすることにした。地球表層と直接関係ある微生物、およびそれらと環境保全との関係を研究しているからである。

## 学科名の改称に寄せて

教授 越 智 健 二

工業化学科が平成10年に創立60周年を迎え、その節目にあたり、これまで時代の要請に応じて改革されてきた学科の教育・研究環境にふさわしい学科名をスタッフ一同で模索し「物質応用化学科」への改称にいたったことは大変意義深いと考えております。特に、これを契機に、環境保全へは一層深く関わることになると思います。環境問題に関連して一言添えさせていただきますと、かの偉大な物理学者アレニウスは、今から100年も前に、世界で沢山の石炭を燃やしているとCO<sub>2</sub>の濃度が増加し、もし、大気中の濃度の2倍(約0.06%)のなると、温室効果によって地球表面温度が4~6℃上昇するだろうと警告したといわれています。しかし、この化学技術の先見も当時は学界からも世間からも全く無視されてしまっていたそうです。それどころか、産業革命以来の社会活動は“豊かさ”の追求を優先させ、結局は豊かさの余りともいえる廃棄物の被害をもたらしたわけです。最早、われわれは環境問題から目をそらすことはできなくなっています。いうまでもなく、環境問題はその予測から対応策に至るまで化学技術との関わりは深いわけで、「物質応用化学科」から“アレニウスの先見”を発信したいものです。

## 物質応用化学科の出発に寄せて

教授 安 江 任

近年、他大学の案内を見るにつけ、学部・学科の新設や改組転換ラッシュにより、これらの名称が目新しく、派手でも内容が理解しにくいものも少なくないように思われる。とくに、最近増えてきた4文字以上の新しい名称の学部・学科にそれが目立つ。今後の大学の冬の時代を生き残る上で、物質応用化学科への名称変更は重要であるが、名称の字数が増えるほどカリキュラムや教育内容が個性化され、自身の充実に拍車をかけるとともに、内容をPRしていく地道な努力も必要である。この意味からも、今回の企画はタイムリーである。

工業化学科の名称変更にさきがけ、平成10年度に科目の新設、削除および名称変更などの大幅なカリキュラムの改正が実施されたが、紙に書いた新しいメニューであるカリキュラムの器に何を盛るかは、私共教員が教育・研究に切磋琢磨することによる学科の活性化にかかっており、私も自助努力しなければと思っております。



## 競争的環境の中で個性が輝く 物質応用化学科を目指して

教授 栃木 勝巳

昨年10月に出された大学審議会からの答申“21世紀の大学像と今後の改革方策について”には“競争的環境の中で個性が輝く大学”という副題がついている。高等教育を取り巻く21世紀初頭における社会状況の展望等から、「知」の再構築が求められる時代に対し、我が工業化学科から物質応用化学科への名称変更及びカリキュラム変更があったものと思う。一方、短期大学部応用化学科も状況の変化を踏まえた対応が求められている。

## 物質応用化学科の出発に寄せて

助手 菅野 元行

工業化学科は平成10年に60周年を迎えました。その間に数多くの優秀な諸先輩が旅立ち、社会の発展に大いに御活躍されました。また、我が国の私学化学系学科の中でも有数の伝統を育んできました。

それでは、新生物質応用化学科は何を目指したら良いのでしょうか。皆様御承知のことかと思いますが、最近の社会状況を顧みて考えてみます。まず、少子化の世代を迎えて、学生個人の適性に応じた教育により一層力をいれるべきでしょう。研究面ではライフサイクルアセスメント(LCA)を念頭に置き、環境、人体ともに悪影響を与えない精緻な化学技術の発展に重点を置かなくてはならないと考えられます。また、学外との交流を活発にするために、本学科からアピールできる研究を推進することも大切でしょう。その学外との交流に学生も参加させることにより、学生個人の化学技術への意識を高めることもできます。その他にも課題は山積していますが、人類の役に立つ化学教育、研究の発展を目指して、我々教職員は尽力していかなくてはなりません。これらを推進するためにも、物質応用化学科が旅立つこの機会に、諸先輩、教職員、学生の交流をより一層活発にして、物質応用化学科が工業化学科時代よりもさらに発展することを願ってやみません。

## 物質応用化学科への期待

助手 森田 孝節

時代の流れとともに私達の学科でも名称変更の時期を迎えた。2010年には18歳人口の減少と共に大学全入の時代となる。戦後の高等学校への進学率の増加と同様な状況が大学にも起きることは否めないであろう。工業化学科で培われてきたことを土台とし、これからの物質応用化学科が大きな飛躍をするためには、学生や卒業生に対する社会の信用を得ることが最短の道程となると私は考える。これは、速効性はないが、必ず将来、良い結果が訪れることと信じる。そのためになすべきことは、学生の基礎学力の充実と現状に迅速に対応できる柔軟な思考体系の構築が必要であろう。その実践については、実験を含むカリキュラムの編成や卒業研究の在り方、更には大学院進学(卒業研究と同一でなくとも良い)などについても議論していく必要がある。

現在、ベストであると思われるアイデアを個々の教員が提案しあい、よりベターな方法を模索していかなければこれからの状況を変化させることは難しい。そのためにも今は格好の時期となろう。教育・研究の両立は決してやさしいものではないが、さらなる学科の発展のため、どちらに片寄ることなく私達は精進していかなければならないと思う。

## 学科名変更に関する寄せて

昭和32年卒 細谷 文夫

工業化学科が昭和13年(1938年)に創設されて以来、60年経過し、人間という還暦を迎えました。ちょうどこの時に学科名も変わります。わたしたちOBにとっては、「工業化学科」自体が、消滅するような一抹の寂しさを覚えます。

しかし、化学関連の仕事をしていて思うことは、自分たちの領域がIndustrial ChemistryからMaterials and Applied Chemistryへ移行したという実感があります。

このような時代情勢に伴い「物質応用化学科」という学科名に変更し、学科内容もその名称に相応しい充実したものになったわけです。

わたしたち卒業生・修了生は、21世紀に対応した内容の学科と教職員の方々とこれまで以上に交流を密にし、産業ビッグバンに立ち向かっていきたいものです。

### 学科名変更に合わせて

昭和45年卒 永島 一男

本年4月から「工業化学科」が「物質応用化学科」に変わるとのこと、喜ばしいことと思うと同時に何となく寂しい思いもします。

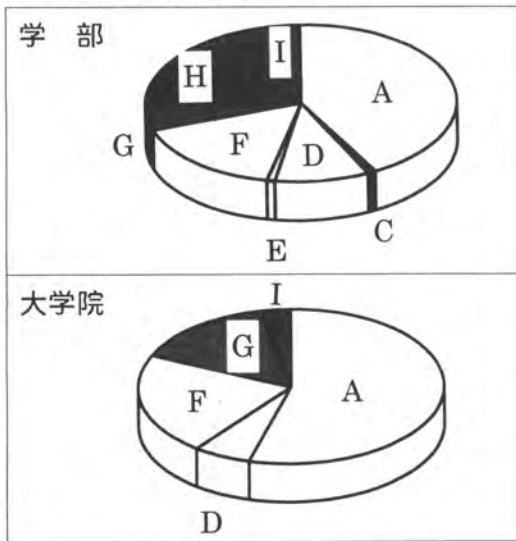
私は卒業後27年になりますが、社会に出てからのことを考えると、世の中の変化は目紛しく、科学

技術の分野では一層著しいものがあります。企業としては、新しい技術に対応してスクラップ・アンド・ビルドを繰り返しています。リストラがある一方で、新しい知識と感性が要求されているのです。

今、「化学」に対しては世の中のイメージが必ずしも良くはありません。最近の「環境ホルモン」問題を始め、目に見えない影響に対する不安が根底にあるものと思います。しかし、それを解決するのも「化学」でなくてはできないことです。

大学にも変革が望まれています。世の中の動きに合わせた新しいカリキュラム、そして「物質応用化学科」に新たな活力を期待しています。

### 平成10年度就職状況



	大学院	学部	学部の%	
製造業	A	18	91	42
電気・ガス	B	0	0	0
運輸・通信	C	0	2	1
商業	D	2	21	10
医療・保険	E	0	2	1
情報・サービス	F	7	35	16
教員・公務員	G	5	11	5
進学	H	0	30	14
その他	I	1	24	11
合計	計	33	216	100

	大学院 (%)	学部 (%)	
製造業	A	55	42
建設・プラント	B	0	0
商業	C	0	1
電気・ガス・運輸・通信	D	6	10
情報・サービス	E	0	1
金融など	F	21	16
教員・公務員	G	15	5
進学	I	0	14
その他	K	3	11
合計	計	100	100

私達と一緒に仕事しませんか！

#### 火薬エネルギーの利用を通して社会に貢献

救難用・宇宙開発用・医療用の各種火工品

### 細谷火工株式会社

昭和32年卒 代表取締役社長 細谷 文夫  
本社工場 〒197-0801 東京都あきる野市菅生1847

TEL 042-558-5111

#### ポリオレフィン系コンパウンドの製造・販売

### 昭和化成工業株式会社

□本社 工場 〒348 8585 埼玉県羽生市小松台1-603-29  
TEL 0485-61-5221 FAX 0485-61-5229  
□技術 試験 TEL 0485-61-5225 FAX 0485-61-5228  
□東京支店 〒101-0032 東京都千代田区岩本町3-3-2 アックス神田8F  
TEL 03-5823-1301 FAX 03-5823-1304  
□大阪支店 〒532-0011 大阪府大阪市淀川区西中島6-1-3 7F 7F 新大阪第2ビル10F  
TEL 06-6307-2727 FAX 06-6307-2748  
□名古屋営業所 〒450-0002 愛知県名古屋市中村区名駅3-15-1 名古屋9代ビル12号階  
TEL 052-581-2211 FAX 052-581-2385

昭和53年卒  
代表取締役社長 池本 俊一

産業廃棄物収集・運搬中間処理のスペシャリスト

### 株式会社 三栄興業

〒341-0044 埼玉県三郷市戸ヶ崎3-302

60年卒 専務取締役 鈴木 義弘

TEL 0489-55-1632 E-mail:sanei@pc-mind.co.jp

化粧品原料から製品まで 化粧品OEMメーカー

### 東色ピグメント株式会社

〒124-0012 東京都葛飾区立石6-37-14

昭和58年卒 代表取締役社長 嶋原 靖宏

TEL03(3693)1050 FAX03(3693)1053



# 《学生は今》 考えていること・悩んでいること・・・

〔学生編集委員〕

今、世の中は不景気に火をつけられ、世紀末の足音ももう、すぐそこに聴こえる。そんな中、60年の歴史を持つ、我が工業化学科に転換期が訪れた。今、学生達はどんな風に考え、何に悩んでいるのだろうか。

1月某日、やってくる後期試験を尻目に、駿河台校舎2号館に学部生10人が集まった。

Q まず、最近どうかな？学校とか。

A (1年・男) 友達とつるんでいるのが楽しいです。

B (1年・男) 男ばかりなんだけれども。

C (2年・男) 今、一人暮らしで、(校舎が替わるから)引越しを考えています。

Q 友達と一緒にいるのが楽しいみたいだね。

F (2年・女) そうですね。学校とかでみんなというのが楽しいです。

Q 学校といえば、学科名が変わるのだけれど。

A 工業化学科というと、工学的なイメージしかなくて、化学の勉強をするのかどうか、いまいわからなかったです。でも、物質応用化学科と聞いて、化学を専門にやるのだなあ、と思いました。

Q 入学してから名前が変わると決まった側としてはどう？

H (3年・女) 別に、一緒かな、と思います。

=====  
学科名称が変わるのは平成11年度からで、カリキュラム自体は、10年度から施行している。一番の違いは、卒業単位数。136単位から130単位へと減っているのだ。そのことを告げたとき、どよめいた。つまり、彼らにとっては、学科名称の変更は“大きな”問題ではないようだ。では、何に関心を持っているのだろうか。聞いてみよう。

=====  
Q 今、どういう事が気になるかなあ。

G (2年・女) 研究室について興味があります。

D (2年・男) 就職とか・・・

Q じゃあ、まず研究室について話してみようか。

I (4年・男) 遅い時間まで、学校に残っていることもあります。でも、研究に取り組むことで、今までで一番充実しているような気がします。

Q “イメージ”と“現実”のギャップみたいなものはなかったかな、いい意味でも悪い意味でも。どこの研究室でもそうだと思うけれども、研究という聞こえはいいけれども、地味で、大変だと思うんだ。

J (4年・女) そうですね。決める前にいろいろな人に聞いた方がいいと思います。思っていた事と違うことをしていたら辛いですからね。みんな、喜んで説明してくれると思いますよ。あとは、工業化学科のホームページで研究室の紹介もしています。

Q なるほど、入っている人に聞くのが一番か。では、就職については？いつ頃から活動を始めたの？

I 3年の秋過ぎから、ハガキを出し始めましたね。

J 早いに越したことはないけれども、最終的には熱意ですね。もう、押しまくります。時には、ハツタリもありです(笑)。

E (3年・男) どういう所に就職するのですか。

I 自分は、化学と関係のないところです。でも、いろいろな所に決まったみたいです。興味に赴くままといったところですかね。

Q 公務員を選ぶなら、いますぐにでも勉強し始めた方がいいよ。

E 先生以外に、化学系の公務員なんてあるのですか。

Q 梓は、どの県もたいぶ狭いけれどあるんだよ。

さつき、ちらっとホームページの話が出たけれど、工業化学科を見たことはある？

F 研究室のホームページに、過去の試験問題を載せている先生がいると聞いて、見ました。その時に他の研究室のものも。写真などが載っていると、見ても楽しいですけど、字ばかりだとちょっと・・・

=====  
ホームページに過去問とは、そんな時代になったのか。驚きである。

今回の座談会は当初、学科名称変更をメインに取り上げる予定であった。しかし、学生にとっては、学科名称の変更より、研究室・就職の方が、重要な問題らしい。これが、すべての学生達の思いかといえばそうではないだろうが、遠からずといったところか。質問の最後に「まだ何か聞きたいことは？」と聞いたところ「たいぶいろいろ聞いたよ」と言いあってくれた。私は、聞けて良かったと解釈したのだが、果たしてどうだったのだろうか。たくさんの方が読んでくださることを願って、このような機会をまたもちたいと思った。08・0Gの方ともこのような会を開いてみたくなった。就職に関しては、かなりシビアなイメージを持っていた4年生に比べて1・2・3年生は、まだ漠然とした考えしかなかったようだ。学生時代は、人生という点から見れば、ほんの少しの時間かもしれない。しかし、思い出に残る時代となることは確かであろう。

暗い話題が続く今、一人一人に精一杯頑張って欲しいものだ。

1年生は、聞き手の案内でメディア研にインターネットをやりに行った。

「工業化学」のイメージとして挙げられる言葉「3K(キケン、キツイ、キタナイ)ーお気づきの通り「工業」も「化学」もKで、3Kどころではないーしかし、私はそんな風を感じたことはないのである。なぜだろう、考えてみた。確かに、一歩間違えば危険な薬品も、装置もあるし、毎日の登校もキツイだろう。その上、白衣の汚れ具合といったら最悪だ。切なくなる。そこへきて学科名の変更！Kには明るい言葉はないのか。否。あるではないか。「感動」「希望」・・・もちろん、

化学工業薬品・電子材料の販売

石井化学産業株式会社

〒193 東京都八王子市緑町429番地の1

昭和41年卒 代表取締役 石井昭久

電子工業用薬品、高純度化学薬品、有機合成薬品、分析用試薬、実験用器具

ふくべ薬品株式会社

本社 神奈川県横浜市今泉1006番地 Tel. (0463)82-2263代 FAX. (0463)83-1459

東京支店 東京都北区上十条3丁目21番3号 Tel. (03)906-6651代 FAX. (03)900-4846

市原営業所 千葉県市原市青葉台4丁目5番6号 Tel. (0436)61-1951 FAX. (0436)61-1770

昭和40年卒 代表取締役 瓜本英雄



## ★★50周年以降の工業化学科の歩み★★

(工化会庶務委員会編)

- 1988 松本太郎教授 定年退職  
工業化学科創設50周年記念祝賀会開催
- 1989 内海 諭教授 定年退職  
日本大学創立100周年記念式典を挙行
- 1990 板橋国夫教授 定年退職  
短大応用化学科山田 翠教授 定年退職  
理工学部創設70周年
- 1991 小嶋芳行助手 新任  
駿河台校舎2号館に工業化学科全研究室が集結  
短大応用化学科上野敦行助教授 定年退職
- 1992 (東京大学名誉教授) 妹尾 学教授 着任  
清水 繁助手 新任  
森田孝節助手 新任  
宮森 宏専任講師 定年退職
- 1993 五来 達元教授 逝去  
(東京工業大学名誉教授) 山中健生教授 着任  
菅野元行助手 新任  
市川次良助教授 定年退職
- 1994 和井内徹教授 理工学部長に就任  
庄子和夫助手 新任
- 1995 池村 紘教授 定年退職  
横手正夫元教授 逝去  
短大応用化学科青木繁樹教授 定年退職  
工藤憲資元教授 逝去
- 1996 東葉高速線開通。「船橋日大前駅」開設  
金丸 競元教授 逝去  
植竹和也助教授 定年退職
- 1997 矢野彰一郎教授物質工学工業技術研究所より着任  
黒柳安二元教授 逝去  
小島和夫教授 定年退職  
田村利武教授 定年退職  
武末知行助教授 定年退職
- 1998 工業化学科創設60周年  
荒井康夫教授 定年退職  
穴澤一郎元教授(生産工学部) 逝去  
短大応用化学科中沢利勝教授 定年退職  
宮森宏元専任講師 逝去
- 1999 学科名を工業化学科から物質応用化学科に名称変更

パッケージと人間の未来を見つめて・・・  
PACKAGE WORLD

## 富士特殊紙業株式会社

昭和47年卒 専務取締役 藤木 孝人  
筑波工場 〒315-0002 茨城県石岡市大字柏原19番2  
Tel:0299-24-3011 FAX:0299-24-3014

## 広 告 募 集

工化時報では会社広告を募集しています。  
広告掲載の詳細につきましては会報委員会まで  
お問い合わせください。

## お知らせ

■ 昭和35年卒のクラス会(偶数年に定例化してから2回目)が平成10年11月6日に私学会館にてOBの先生方の参加を頂き開催されたとの便りを安達昭郎様(昭和35年卒、ピーアンドシー(株))からいただきました。学生時代と同じくいつもの楽しさあるクラス会だったそうです。次回の開催予定は2000年11月10日だそうです。

■ 14号の当欄でご紹介した有井達也君が今年も大学箱根駅伝に出場して活躍しました。この3月の卒業式での理工学部長賞の受賞も決まりました。

■ 2000年の3月の日本化学会春季年会は船橋校舎で開催されます。

■ 理工学部では開かれた大学をめざした行事を予定しています。7月11日(日)オープンキャンパス(船橋校舎)、10月31日(日)キャンパスウォッチング(船橋校舎)、青駿祭期間10月28日(木)～11月1日(月)駿河台シティキャンパス博(仮称)(駿河台校舎)などが予定されています。お時間がございましたらぜひ足をお運びください。

■ 新しい工化会名簿が発行されました。予約はすでに締め切っており残部僅少ですが、ご希望の場合はお問い合わせください。また住所変更などがありましたらお知らせください。

■ 工化時報では引き続き皆様からの投稿をお待ちしています。また会社広告もぜひお寄せください。

## === 編 集 後 記 ===

前々号から会員の皆様にはお知らせしてきた学科名称変更が本年4月に行われます。本号は、学科名称に至った経緯や教職員の新学科への抱負あるいはOBの方からのメッセージなどで構成した特集号を企画しました。ご協力頂いた皆様、どうもありがとうございました。次号からは平常(?)のスタイルになる予定です。また会員の皆様の中で記事の企画案などがありましたら会報委員会までご一報ください。

## 発 行 所

東京都千代田区神田駿河台1-8  
日本大学理工学部工化会会報委員会編集委員会

- 伊藤 和雄、滝戸 俊夫、永島 一男、澤口 孝志  
森田 孝節、深津 誠
- D3 遠山 岳史
- M1 加藤 恵子、宗田 雅裕
- 4年 青木 徹、梅沢 麻耶、佐藤 亮介
- 3年 荻野加奈子、杉本 典子、太丸 卓、前川真貴子
- 2年 河井美奈子、河村 真由、小島 正浩、末広 智  
中村 幸二、松沢 齊